

2 学校・居場所 地域や支援団体の受け入れ

コロナ社会  
フェイスグース  
結び直す

# 非常時「息抜き」守る



「久しぶりー!」。京都文教大講師の小林大祐さん(60)が声を掛けると、女子児童は「先生、髪切った?」と笑顔で返した。

京都市伏見区のコミュニティスペース「京都文教マイタウン向島(MJ)」で12日、「子ども食堂」が開かれた。新型コロナウイルスの影響で2月を最後に活動を休止し、約10カ月ぶりの再開だった。コロナ禍で子ども食堂のような学校、家庭以外の「第3の子どもの居場所」が注目されている。学校の休校や保護者の収入減などで子どものストレス増加が懸念されているからだ。

MJでの子ども食堂は2014年から始まり、毎月2回、無料で子どもたちへの料理講習や食事の提供をしてきたが、今回は感染予防のため弁当の持ち帰りに変更した。それでも午後3時から児童10人ほどが立ち寄った。手作りのハンバーグ弁当を手渡された

- ▷ 「子ども食堂」弁当に変更、顔見て渡す
- ▶ 学習支援 教える大学生来られぬ時も

6年生の男子児童(12)は「昼ご飯を食べてなかったたのでうれしい」と喜んだ。

小林さんは「ここは食べることを真ん中に据えて子どもたちが集まる居場所。何年も会っているところよつとした変化に気付くことができる」と話す。

子ども食堂について、市社会福祉協議会地域支援部長の横井真さん(49)は「子どもたちもしんどい思いをしている。そんな時、息抜きができる地域の居場所や、声を受け止める『おっちゃん』『おばちゃん』らの存在は大きい」と説明する。

しかし、そうした第3の居場所も新型コロナウイルスの影響で今春以降、一斉に活動の自粛を余儀なくされた。市社協が10月に行ったアンケートでは、市内で子ども食堂や学習支援をする92団体のうち6割が活動を再開・継続していたが、約4割は休止や延期をしている。

背景には感染拡大への懸念のほか、人員や会場の不足がある。市内18カ所で中高生の学習支援に取り組む市ユースサービス協会(中京区)は6月から徐々に活動を再開した。しかしボランティアの大学生が大学による学外活動の制限で参加できなくなった。会場としていた福祉施設が使えなくなったりした。

同協会チーフユースワーカーの竹田明子さんは「ある中学生から『いつもの大学生が来ないと意味がない』と言われた。京都文教マイタウン向島で開かれた子ども食堂。スタッフの女性が子どもたちに弁当を手渡ししていた(1日、京都市伏見区)」

れた。継続して自分のペースに寄り添ってくれる人がいることが大事だ」と強調する。

コロナ禍で分断された子どもたちと地域のつながり。徐々に結び直されつつあるが、居場所の運営団体からは「本当に困っている子がどこにいるか、家族がどうしているかは分からない」といった声も漏れる。

「2、3人程度の子どもを受け入れる小規模なケア型の居場所がもっと増えてほしい」。大津市のNPO法人「子どもソーシャルワークセンター」理事長の幸重忠孝さん(47)の望みだ。同センターは子ども食堂のほか、小中学生2、3人が無料で午後5、9時ごろに食事や遊び、銭湯での入浴などで自由に過ごせる事業「トワイライトステイ」に14年から取り組んでいる。児童生徒の問題解決を支援する専門職「スクールソーシャルワーカー」や学校などと連携し、支援が必要な子どもを受け入れてきた。子どもは少数だとスタッフと気兼ねなく仲良くでき、本音で困り事を話すようになる。

コロナ禍を受け、トワイライトステイの開催を週2回から5回に増やした。毎週通う中学1年の女子生徒の母親(37)は「母子家庭なので週1回でもご飯を食べて帰ってくれると助かる」と語る。

幸重さんは「自宅に車があっても生活が厳しいなど子どもたちのSOSはなかなか外から見えない。しかし居場所が小規模で定期的に来てると察知しやすい。子どもたちが選べる居場所が多くなることが大事だ」と指摘する。(三村智哉)